

人と動物の物語 1

日本古代の牛をめぐる

森 浩 一

各地の博物館にでかけると馬の埴輪はよく陳列されている。これにくらべると牛の埴輪はあるにはあるがたいへん少ない。古墳時代に馬の方が多く、牛は少なかったから、その多い少ないが埴輪の登場頻度となつていてという解釈が一般的だ。だが、どうもそうとばかりはいえない。

神社にでかけると絵馬をかけるお堂はあるが、絵牛という言葉は知らない、牛を描いても絵馬である。それと競馬の異常なほどの人氣にくらべると、闘牛は南国の局地的な人氣である。

そればかりか、戦後にでたもつとも影響力の強い日本歴史の学説といわれている江上波

夫氏の『騎馬民族征服王朝説』は、その学説の当否は別にしても、馬が日本の政治支配に大きな役割をもっていたことに变りない。

このように、馬にくらべて牛への関心がとぼしく、したがって古代牛の研究も多くはなかった。ところが昨年の秋、私が急に牛の騒動にまきこまれてしまった。それは次の電話からはじまった。

「昔、酒詰仲男先生が長崎県五島で発掘された古代牛の骨をお貸し願いたいのです」

酒詰先生は、同志社大学考古学研究室の創始者で、学風は貝塚研究を得意とされ、土器や石器だけでなく、貝はもとより動物や魚の骨にも造詣が深かった。とくに一九五九年に

出版された『日本貝塚地名表』は労作として今日でもよく利用されている。

酒詰先生は長崎県教育委員会の主催する「五島遺跡総合調査団」に参加し、福江市の大浜遺跡を一九六二年に発掘しておられる。弥生時代を中心に、一部はその後の時代にも及ぶ福江島での最大規模の遺跡である。この調査で九体の弥生人の埋葬が発掘されたが、そのうち四体にウシの歯がそえられていた。これとは別に、いずれも小型の、ウシ、シカ、イノシシの骨も出土した。これらの発掘の事実を酒詰先生はその二年後に出版された『五島遺跡調査報告』のなかで淡々と述べられた。先生が他界される前年のことであつた。

三世紀に中国の陳寿が著わした『三国志』には、俗にいう倭人伝（東夷伝の倭人条）が含まれていることは国民的常識になつてゐる。私など、もう四〇年も利用させてもらつてゐる名著だが、惜しむらくはこの著者は日本列島を訪れた経験はなく、さまざまな情報によつてまとめた書物である。だから地理感覚にかける難点がある。これからこの連載では倭人伝がときどき話題になるだろう。

その倭人伝に「その地に牛、馬、虎、豹、



日本古代の牛骨発掘の記念碑
(長崎県福江市大浜遺跡)

羊、鵲^{じやう}なし」の一文がある。トラ、ヒョウ、ヒツジがいけないのは当然として、ウシとウマについては本当にいなかったのか、それとも倭国に來た中国人が見聞した地域にはいなかったのか、そこが問題になる。というのは、倭人伝を読むと、中国人の使者が長期間滞在しているのは、主として玄界灘沿岸の佐賀県唐津市から福岡県前原町にかけての北部九州西部地域なのであり、その地の見聞が倭人伝に濃厚に反映したとみられるのである。先ほどの大浜遺跡の弥生人にもなった牛歯は、もしこの「ともなった」という觀察に間違いがないかぎり、倭人伝の時代より百年か二百年は遡る。

私は一九八〇年からしばらく産経新聞に

「母と子の歴史散歩」を連載し、のち『倭人伝の世界』（小学館創造選書）という本にまとめた。身近な話題からの考古学入門をめざしたもののだが、このとき古代人とウシにもふれ、大浜遺跡の出土例などを紹介したあと「弥生時代には西北九州の一角を別にすると、ウシはまれな動物であった」とし、さらに「古墳時代の後期あるいは末になって、ウシは田畑の耕作用としてぼつぼつ利用されはじめた」と言う見通しを述べた。もう十年も前のことである。

そのころから、私は日本の地域文化の面白さに没入しはじめた。かたたんといえ、日本文化を今日まで支えてきた根底は、都だけの力ではなく、地域それぞれの特色が発揮されたのであるということである。もちろん『古事記』や『日本書紀』など都で編纂された歴史書では、当然のこととして都中心、支配者中心の立場で貫かれ、各地域を一段と見下していることが多い。この立場では、文化はすべて都（中央）に入ったり育ったりして、そのおこぼれを各地域（地方）がお裾分けにあずかるという見方をしがちである。

この立場は文字で書かれた歴史では史料の

性質上そうなりがちであるが、過去に人類が住んだ土地ならどこにでも遺跡や遺物はのこるから、考古学は地域の研究ができる。最近では考古学の定義に、文字の有無にかかわらず、地球上のさまざまな地域の歴史的推移を復元することができる点を強調すべきだと私は考えるようになっていく。

少し途中の話が長くなったが、五島出土の牛歯についての問い合わせをうけたとき、牛についてはとくに知識が深まっていたわけではないが、日本列島周縁部の島々についてはかなりの整理ができていたのは幸いであった。例えば、私が編集に加わった『日本の古代』（中央公論社の第二巻は、『列島の地域文化』の題で出版し、そのなかでは五島列島についてもかなりの頁を費やした。

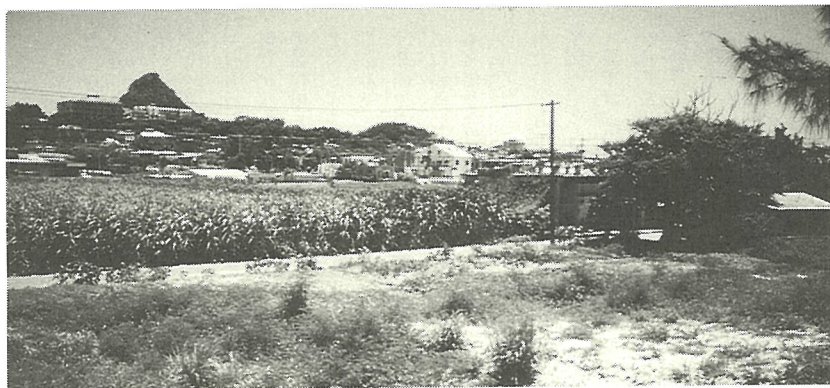
福江市ではこの春、五島観光資料館がオープンすることになり、それと連動する形で市内の遺跡が顕彰され、大浜遺跡には「日本古代の牛骨出土地」の大きな石碑がたつた。酒詰先生が生きておられたらさぞ驚かれたことであろう。だが何分三十年前の調査であり、現在の考古学の水準では究明されていないことのあるのは仕方がない。現に正林護氏の著

わした『日本の古代遺跡・長崎』（保育社）では、大浜遺跡についてウシの歯の出土は重要と指摘しながらも、「この報告書には土器について詳しい記述がない」としている。

後でわかったことだが、この石碑について本当に日本最古の牛かどうかにはクレームをつける人がいて、市当局が困つての私への問い合せになったようである。仄聞したところでは、名の通つたある学者が、福岡県にも出土していないのに、五島に弥生時代のウシがいたのはおかしい」という感想が発端のようだったらしい。中央主義というのは、大和とか江戸がそうであるだけでなく、九州島の単位にもある。心すべきことだ。

五月中旬、佐賀県でのシンポジウムのおと、福江市で講演することになり、久しぶりに大浜遺跡も訪れ、さまざまな角度で五島が果たした歴史的役割、ひいてはウシの問題についての意見を述べた。何よりも、大浜遺跡の範囲確認の調査の必要性を訴え、その進展のなかで牛骨の年代も解決するであろうとしめくくった。

七月になって授業が終わるのを待ちかね、これも久しぶりに沖縄本島を訪れた。ここで



弥生の牛骨の出た阿良貝塚

〔沖縄県伊江島、島の中央にグスクのあった聖なる山がそびえ、その麓（手前）に遺跡がある〕

は、研究者たちの熱気がむんむんしている。最近の発掘成果をたずねてまわるうち、伊江島の阿良貝塚で弥生土器の層から小型の牛の骨が出土しているのを知った。

発掘担当の安里嗣淳氏から、報告書にはただ出土の事実だけを述べておいたが、弥生時代の層にあったのは間違いないこと、当時動物学者からとどうして古代牛の存在を認めるのに躊躇するのかなどの注意をうけたことを、泡盛をのみかわしながらうかがった。弥生時代にウシがいたのはまぎれもない事実である。

福江市での講演のとき、阿良貝塚の牛骨のことを知っていたら、五島のことをもっと自信をもつて話すことができたであろう。それにしても、日本の古代の牛は、シナ海に臨んだ島々でまず飼育されはじめている。そういえば、平安時代に都で牛車をひく牛も、五島や平戸などの牛が好まれたことを読んだことがある。もちろん弥生時代の五島や伊江島の牛の飼育の目的が何だったのか、これはさらに追求しなければならない。

（大学文学部教授）